



シナリオ版さよならジュピター
小松左京書店 (文庫)
徳間書店 (1/15刊・¥280)

映画『さよならジュピター』の最終シナリオが本書。小松左京版の原本を、映画に合わせて改稿したもので(第五稿)、製作過程でかなり手が入っている。映画そのものはまだ見ていないから、このシナリオと小説版との対比を中心に読んでみた。一読して、原作にあった「太陽系最期の日」(クラーク) + 「日本沈没」の雰囲気、もしかすると『妖星ゴラス』(一九六二年東宝) 風になっているんじゃないか、という割と無責任な感想が湧いてきた。冒頭で妖星に吸い込まれていくロケット、衝突コースにある地球をなんとか助けようとする科学者たち(手段は『ジュピター』とは違いますが)、どことなく似ているでしょう。こう想像したのは、原作にあった、太陽を脅す謎の追求過程がなくなり、また大船団を組んで外宇宙に脱出する宇宙船のシーンも見当らなかつたからだ。地球上でのパニック場面がないのはいいけれど(もしあったら『地球最期の日』五一年パラマウント)、小説とはややムードが異なるかもしれない。ただ、これは映画の良し悪しとは、また全然別の問題。どんな画面になっているかたのしみだ。